

スポーツ運動技術の「発見」に関する主観構造について

佐野 淳

(1990年10月15日 受理)

Zur Problematik der subjektiven Struktur von der "Entdeckung"
der sportlichen Bewegungstechnik

Atsushi SANŌ

問題の所在

スポーツにおける運動技術論(研究)の流れは大きく2つに分けられる。1つは、ポイテンディクの間人学的運動理論⁵⁾を背景にもつ1950年頃から1960年代のマイネル³⁶⁾やベルネット³⁾の研究に代表される運動学的な技術論(23.20頁)で、それはとくに運動様式や運動鑄型化といった周辺的問題との混乱にどう対処するかが議論の中心であったと同時に、術語論的研究に深まりが見られ、運動技術の何たるかに問いかける本質問題の究明が活発化した。この流れは本格的な技術研究の幕開けとして位置づけられている(17; 23.20頁)。2つ目は、1970年以降に活発化してきたスポーツトレーニングの一般理論の台頭による自然科学的運動研究に支えられたもの(23.20頁; 25)であるが、もちろん、その根底には、19世紀の人間の歩行の物理学的・力学的研究、20世紀になって台頭してきた筋生理学やスポーツ生理学、整形外科学など、人間の運動を(自然)科学的に究明しようとする自然科学的研究の流れがあることは言うまでもない(25.3頁以降; 47.66頁)。とくに今日では、コンピューターやサイバネティックスあるいは情報理論等の急速な発達が生体科学界にも多大な影響を与えた。したがって、そうした最先端の科学や技術を応用した研究による運動技術の解明という事態が、現代的なスポーツの運動技術研究の傾向として位置づけられるのは故なしとしない。とくに、最新のコンピューター機器を最大限に利用したバイオメカニクスやスポーツ生理学、あるいはサイバネティックス理論に基づく感覚運動理論などの分野は、運動技術の研究では必ずといっていいほど重宝がられる学問分野ではある。

しかし、こうした現在の研究が、これまで、実践問題としてのスポーツ運動技術の問題をどれほど明らかにしてきたと言えるのだろうか。もちろん、運動の構造やそのメカニズムなどに関しては各分野(バイオメカニクス、スポーツ生理学、スポーツ心理学など)ともそれなりに明らかにし

てきたと言えるが、運動技術「そのもの」の発見—構造については依然として明らかにされていないと言えよう。それは現場と研究サイドの一種の断層が原因なのであるが、現実には現場が実践のなかでどんどん技術を開発し普及させているのである。つまり技術はそもそも現場で発生するものであるし、それはわれわれが過去において実践の場で発見してきたものであるとともに、これからもそのようにして発見していくものであることを指摘できる。言うまでもなく、それはすでにマイネルが指摘していたことなのである (36.14頁)。しかし、そこでは「運動技術の発見」という問題がどういうことなのかはあまり触れられていない。スポーツ運動技術ということで、そもそも、われわれは何をどのようにして発見しているのだろうか。スポーツの運動技術の問題の核心に迫っていくには、ほんらいこのことは避けられないことであろう。本研究の論点はまさにここにある。われわれの求めるスポーツ運動技術が、金子のいう「生き生きとした生命を与えられたスポーツ技術」(22. - S.112)である以上、それは主観の問題と切り離せないものであり、従ってこうした問題は、当然、人間学的—現象学的—運動学的な地平(22; 24.55頁以降; 25.1頁以降)で考察されることになる。

1. スポーツ運動技術の導入的考察

(1) 「できる—できない」問題系におけるスポーツ運動技術の位置づけ

スポーツの実践においては、できる、できないということがよく言われる。それは言うまでもなく、与えられた運動の課題に対し、それをうまく達成できたかどうかという問題である。しかし、スポーツ実践においては、そもそもその課題が与えられた当初はそれが達成されないのが当たり前で、練習を積み重ねることで、できる状態へと移っていくのである。つまり、そこには必ずできない状態からできる状態へと移行するプロセスが存在するのである。運動の学習位相や個体の運動発達の推移を見てもそれは明らかであろう (36.286頁以降; 374頁以降)。しかし、いくら正しい技術を教えられても、最初はその通りにできない、すなわち、身体を動かすことができないし、十分な達成性を示し得ないのが普通である。そこに直ちに筋力や柔軟性、持久力あるいは調整力、敏捷性などの体力的な要因を取り上げて、それらの解決が直接に「できる—できない」の問題に対処し得ると考えるのは、極めて短絡的で危険な思考形式である。それは、運動構造の無視あるいは無知によるものであるが (20.16頁)、運動の達成性という点から見れば、そこには第一に合理的な運動の「し(やり)方」で実施されるのが理想とされるのであり、そうした運動の「し方」の中ではじめて体力的な要因の改善に目は向けられるべきである。例えば、け上がりができないという場合で、とくに振れ戻りの際、脚が鉄棒に近づけられていない場合を考えてみよう。技術的に見れば、鉄棒へのこの脚寄せは不可欠な要素とは言えないが (21.330頁以降; 18.493頁以降)、成功させるのには方法論上有効な手段であると言える。このような事態において、この脚寄せができないのは直ちに腹筋がないからだとして腹筋を強化する方法を選択するのは、まさに運動の達成性は体力要因に直接的に左右される、という考え方に基づいていると考えられよう。あるいは運動の「し方」に対

する第一義的な意味が薄らいでいるか、あるいは、その位置づけの正しい理解が得られていないことを示している。実際のところ、このような事態において、腹筋を強化したところで、け上がりはできるようにはならない。少なくとも、理想的な美しいけ上がりは…。したがって、そこではそもそもけ上がりができないのは腹筋が弱いからだ、という結びつけがどうして生まれたのかが問われなければならない。そこにおいては運動の「し方」の問題性にどれほど目が向けられたのだろうか？ そうした問いに正当に答え得るには、われわれはまず、「できる—できない」という問題系の構造を知っていなければならない。

言うまでもなく、今日のスポーツには、技術要因の関わりが高い種目やおもに筋力や持久力など体力を必要とする種目、あるいは、集団的・戦術的な要因が重要であるような種目などがある。このことは、言うまでもなく、技術スポーツ種目には技術が関与し、そのほかの対人種目や持久的な種目には技術は関与していないということを意味しない。そこでは技術や体力、戦術の比重の問題を捉えているわけであって、従って、技術スポーツ種目（Technische Sportarten）では「技術」の関わりが大きく、持久種目では体力的要素が大きく関わっているという点を問題にしているのである。しかし、見落としてならないのは、「技術が重要な役割を果たしていないスポーツ種目などない」（46. — S. 40）ということである。つまり、いかなるスポーツ種目も技術はその競技性にとって重要な役割を果たしているということである。例えば、体操競技であってもフィギュアスケートや飛び込みであっても、またレスリングや柔道、ボクシング、テニス、バドミントン、さらに水泳、重量挙げ、障害走などであっても、その比重はどうあれ、技術性（運動正確性、運動正確性と運動スピード、また状況に応じた正確性と運動スピードなど）は無視できない（46. — S. 40 f.）。むしろ、その達成に対しては直接的に関与していると言えるのである。

このことは、どんな運動の達成というものも、そもそも技術によって果たされるのだということの意味している。この場合の技術といわれるものは、運動の「し方」を意味し、運動課題の達成を保証する「そのような身体あるいは四肢などの操作ができる」ことである。もちろん、そのためには、感覚的な問題（例えば、ひねり宙返りでの「ひねり」技術を用いる際の左右の方向感覚の混乱：18. 180頁；192頁および次頁）や体力的な問題（例えば、伸腕伸身力倒立ができるためには、もちろん、最低限いくらかの筋力は必要である）が関わってきて、誰でもすぐできるというわけではない。マルチンも言うように、運動の達成には（技術トレーニング）、学習者のそれ相応の習熟の水準（現在の状態）が前提になるが（32. — S. 183.），しかしトレーニングや練習の目標とされるのは、運動の達成のためにあくまでもその運動の「し方」を知ってできることなのである。体力を強化するというのは、運動達成の点からみれば、その運動構造（Bewegungsstruktur）を十分知った上で、課題に合うように処方されなければならないと言われるが（20. 16頁），このことこそ、その運動の「し方」そのものが直接的にその運動の達成を保証していることを示唆するものである。このようにわれわれは、「できる—できない」問題系には、（運動）技術が直接的に運動の達成を支えているという構造が存在することを捉えていなければならないのである。

(2) 運動技術概念の源流

「スポーツ運動技術とは現場で発生し、かつ検証されたある一定のスポーツ運動課題の最善の解決法である。この課題解決の仕方は合理的でなければならず、換言すれば、現行競技規則の範囲内においてより高いスポーツ運動の成果を達成するための合目的なかつ経済的な仕方で行われなければならない」(1960)というマイネルの運動技術に関する概念規定(36.261頁)は、きわめて重要な内容を提供していると思われる。運動技術は、一般に、身体操作に関する体力的、制御的な機構あるいは力学的—バイオメカニックス的メカニズムに目が向けられ、客観的な分析対象として位置づけられているが、しかし、それは実際に身体を動かす中でしか獲得されない運動の「し方」にはほかならない。「手首をこう返して」とか「肩の力を抜いて」あるいは「腕をここで引きつけて」など、スポーツ運動を習得する場合には、われわれはその運動達成を保証していると思われる多くの身体上の操作(運動のし方)を学ぶが、そこでは、身体がどのように(位置)変化しているのか、あるいは身体各部がどのような状態からどのような状態に変化しているのか、身体内で何が起きているのかといった客観的事実を知ることではなく、むしろ、われわれの身体をわれわれ自身ができるように「動かし」たらよいかを学ぶのである。この両者は主観を離れた出来事に目を向けるのか、主観内部での出来事に目を向けるのかの違いでもあり、区別しておかなければならない。このことは、運動技術の概念の源流はどこに求められるかを検討していくことによって、よりはっきりとしてくるとと思われる。

スポーツ運動技術の概念の本質を明らかにするために、まずその「技術」概念の検討から入ることに異論はないであろう。その場合、われわれはとくに科学技術が主題となる今日の意味の一般技術論に足がかりを求める場合(28.59頁)と、古代ギリシャや中世における経験的技術にそれを求める立場(17.91頁)があることを指摘することができる。前者は、運動技術は科学的、客観的に把握され得る対象であるとし、その科学的問題性が主題であるが、後者では身体的運動をめぐっての経験的—実践的視点に主眼が置かれ、技能や熟練、器用さ等が主題となっている。今日の技術の一般概念は、科学と一体となって捉えられているのが普通である。つまり、現代の技術は、産業革命以来、自然科学の進歩と資本主義経済の発達による機械的・工業的な生産技術、核兵器などの軍事技術、遺伝子工学の技術などに代表されるような科学技術を意味しているのは論をまたない。ここでは、技術は自然法則の応用であり、実験であり、科学的成果をある目的の達成のために応用することなのである(40.15頁および次頁)。つまり、直接的に人間主体が関わらない問題になっていると言える。そこにこそわれわれのスポーツ運動の技術と相通ずるものを捉え得るとする立場からすれば、当然、スポーツ運動技術を自然科学的に解明できる、あるいは自然科学的な問題性としてスポーツ運動技術は措定され得ることになる。小林はこの立場に立っている(28.58頁以降)。

しかし、技術の一般論において、上記のような科学技術に代表される技術概念は、むしろ、きわめて今日的であることがわかる。つまり、人類の歴史において技術といわれるものは、これまで常に人間主体と密接な形で問題にされてきた、という経緯があるからである。古代ギリシャにおける

技術に相当する語は、〈technology〉の語源ともされる、ほんらい「家を建てる業」を意味したと推測される tekne（テクネー）であるが、常用される場合にはさらに発展して「巧みにものごとを処理し、あるいは操作する能力」が意味されたという（40.72頁以降）。ラテン語の ars もある意味でそうした巧みさ、腕のよさを表すものだと言われる。しかし、プラトンはさらにこのテクネーを、自然のなかにほんらい存在する因果的な関係を知的に把握するエピステーメ（epistēmē）と結びつけて、単に経験を積み重ねることのなかで得られる技法（tribē：トリベー）と区別した（39.14頁；40.74頁以降）。すなわち、例えば料理の技法や絵を描く技術、彫刻を彫る技術などは、日常経験の積み重ねや訓練の積み重ねの結果に得られるわけで、それはものごとを巧妙に処理する能力であり、さらに自然を貫く因果関係を合理的に把握した結果に必然的に得られるわけではないドクサ（思い込み）によるアゴロスなものとして、それらはテクネーではないとした。プラトンにとってはテクネーとは、エピステーメに支えられた技術であり、能力であったのである（39.14頁；40.76頁）。

今日の科学技術の概念は、言うまでもなくプラトン流のエピステーメ・テクネー説を継承しているが（23.21頁；39.16頁）、しかし、スポーツ運動技術の問題は、そこで対置する形で取り上げられた、まさにトリベーの問題こそに通底していると思われる。金子はこの立場に立っている¹⁷⁾。プラトンがテクネーとトリベーを区別した基準は、それが自然の因果関係を知的に把握しているかいかなかであった。村上は、その例として建築（大工）の技法を挙げ、直角を得るために、一本の縄のループを3・4・5に分割して用いることがあるが、それが単なる経験の積み重ねから知られるようになって使う限りではそれはトリベーであり、一方それがピュタゴラス的、数学的な知識から演繹的に生みだされ、裏付けられているならば、それはテクネーと呼ぶにふさわしいという（40.76頁）。つまり、現代的に解釈すれば、身体的訓練などによって身につけた知（技法）は技術ではないということになる。例えば、自転車に乗ったり、楽器を弾いたり、ボールを操作したり、宙返りをしたりなど経験や訓練によって得られるその「し方」、すなわち、必ずしも理路整然と知的レベルでそのロゴスが扱えない熟練や習熟などの世界あるいは「こつ」や「勘」の世界は、身体や運動の完全なる科学的知識を獲得し、その因果性を知悉した結果得られているわけではないので、それは技術ではないとする。そこでは技術は人間を離れて他者に限られている、というプラトン流のテクネー理解がある（39.16頁および次頁）。しかし村上によれば、その場合の他者が必ずしも客観的対象として措定されているものではないということから、われわれが身につけたもの（トリベー）も、結局は技術としての性格を有しているということが指摘されることになる。

それは、この身体レベルでの〈知〉、いわばトリベーとしてのアゴロスな〈知〉も人間の本質的な、そして根元的な「知」の根拠の少なくとも一部として認められることを意味する。つまり、技術と捉えうるのである。事実、村上はプラトンがテクネーから排除した料理術（トリベー）は明らかに技術であると結論づけている（39.18頁）。このことから技術には「訓練による熟練という側面」も与えられることになるし、「技術を身体的訓練によって習得」するとか、「訓練によって『技

術』に習熟』するという表現が可能になる (39.16頁および次頁)。この関連で言えば、オルテガが技術発展の様相を三段階に分類して、その中で捉えた第二の発展段階を代表する靴屋、鍛冶屋、左官などの「職人の技術」にも同様のことが言える (17.93頁; 22. - S.102 f. ; 43.86頁以降)。つまり一種の手の熟練や一定の運動形態の習熟 (製作運動系) や現在ある道具を目的的に経済的に取り扱う方法 (使用運動系) である生産技術は、「人間がみずから考案し、練磨し、蓄積してきた」ものなのであり、また、今日においても旋盤工や大工などの職人、さらには生産領域ではないが、陶芸家やピアニスト、バレリーナなどは、そこに「こつ」あるいは「勘」を掴むことが求められているのである (43.110頁以降)。それはまさにトリベー (技法) であって、経験を積み重ねることではか身につけることはできない。このようなことからわれわれはスポーツ運動において取り上げる技術 (運動技術) の源流は、古代ギリシャにおける経験的・体験的に得られる身体の技法 (トリベー) あるいは職人の技術と理解しておくものであり、今日の科学技術概念からは導き出せないとする立場に立つものである。また、このような根拠は次のような金子の指摘する両者の相違点を重視しているからである。つまり「生産技術も個人の動作習熟を無視することはできないであろうが、次第に自動化されて動作の局限化の方向に進むのに反して、運動技術は高度になればなる程、その前提となる運動の質的習熟や身体的能力は多く要求されることになる」 (17.108頁)、と。

2. 〈知〉としてのスポーツ運動技術

(1) スポーツ運動技術の主観—客観問題

運動のある有効で効果的、また個人的で主観的なし方 (やり方) は、一般的には、単にその人のやり方やさばき方、あるいは個人技法 (19.35頁) などと呼ばれたり、また「こつ」として捉えられたりする (18.203頁: 220頁)。そうした極めて個人的で主観的な運動の仕方 (個人技法) から出発してその中から誰にでも共通して適用できるような公共的、客観的な内容 (運動のし方 < die Art der Bewegungsausführung > 11. - S.38) を抽出して、それに運動技術 (Bewegungstechnik > Sportliche Technik : 33. - S.404) と言う名称を与えているのが一般である (18.203頁以降: 220頁; 52. - S.225)。このように、運動技術は基本的に公共的で客観的でなければならないということもあって、今日一般的にはその運動の「し方」 (運動技術) に関しては実験による解明の方法をとることが多く (18.223頁以降)、科学的な表現によって運動技術を取り扱うべきである (27.14頁) とする立場が優勢であることは否めない。例えば、スポーツ技術は科学的分析方法で客観的に記述される (52. - S.225) とか、バイオメカニックス的—数学的に記述される (10. - S.8)、あるいはそもそもニュートンの運動方程式はスポーツ運動に厳密に成り立つとして、スポーツ運動は力学で説明されるものだとしたり (54.13頁)、さらには、人間の勘やこつも結局は客観的で合目的な法則性に従っている (30.23頁) としたり、運動系の定性的現象も一定の定量的原因をもってしているとしてその数学的公式化が運動研究には重要だとする。ここにわれわれは、一方に主観があり、他方に客観があるという二元論の立場に立った近代の実証主義的研究で、すべてが明るみに出され

るとする構図があることを指摘することができる。そこではあいまいな主観の認識ではなく、客観としての対象に真理・真実があるとする思考形式が前提とされているのは言うまでもない(48; 49; 50)。

われわれがある運動をする場合、その時間—空間においてわれわれは多くの内容に注意し、体験し、感じ、そして、そこから何か重要な事柄を習得するが、それらは主観的な事柄であって「信頼できない知覚」とか疑わしい報告とされ(22. — S. 109), 軽視される現状は否定できない(15, 27, 36, 54)。そして、それはその運動の外的な像(運動形態)やその運動生起に関わる、力学的要因や生理学的要因などの運動者主体とは無関係な客観的要因が原因となって現れ出た単なる「内的姿」としか理解されていないのが一般である。だから、「こと」の本質をその客観的要因やそのメカニズムに求めようとする。つまり、感覚や知覚というものが「必ずしも正しく外界を反映していない」(15. 109頁)ことから、われわれの感覚は非厳密性ゆえに信頼できないし、「こと」の本質は掴めないのだと決めつけてしまう。より厳密に規定できる要因にその根拠を求めようとする態度がそこに読み取れる。しかし、そもそもわれわれの感覚や知覚は「必ずしも正確に(自然科学的方法によるように)外界を捉えるための機能ではない」のであり、むしろ、その知覚の限界と目的および独自の機能を理解しておくことこそが重要なのである(15. 110頁)。こうしたことは、主観のあいまい性—客観の絶対的真理性という考え方に繋がっていくが、われわれはそこに、主観と客観は一致するか、ということをめぐる近代哲学の中核的問題が背景にあったことを知るべきである⁴⁸⁾。ここでこの問題に触れておくのは、今日一般的になっている(自然)科学的思考あるいは実証主義が自然科学の分野でふさわしいものであっても、果たしてこれから展開される運動技術の問題においてもそれが妥当であるかどうかをまず検討しておく必要があるからである。自然科学的思考がすべての分野に通用すると考えてはならないということは、これまで多く主張されてきた(5; 15; 42; 45; 48; 53)。それは運動技術の何たるかを明らかにするためには欠かすことは出来ない前提であるにもかかわらず、これまで必ずしも十分に検討されてこなかった。

主観と客観は一致するか、というその確証をめぐる問題は近代哲学の難問中の難問であったが、そうした問題に取り組まざるを得なかった理由は伝統的な真理概念を保証するためであった。あるがままの現実(客観)を“正しく”主観が認識するということが、すなわち現実(客観)と認識(主観)の一致はヨーロッパの哲学において真理と呼ばれてきたが、この客観と主観の一致が証明されることは、人間の理性は世界の客観を「正しく」捉えることができるということの証でもあったのであり、それまでの近代の実証科学の成果を正当化するためにも是非とも必要だったのである⁴⁸⁾。こうした考え方は結局、仮説の正しさは実験によって確証が得られる、あるいは主観の曖昧さは客観によって証明されるのだ、とする自然科学的—実証主義的方法の万能性への主張へと繋がってきたことは論をまたない。このような点に関して、例えば心理学において、この自然科学的方法に則った実験研究が優勢であり、そこには「こころ」あるいは意識の問題が排除されて自然科学色に染まっている心理学の現状を、石原は批判するとともに憂慮し、知覚についての検討を通して、意

味と記号の重要性を唱えている¹⁵⁾。ところで、この「自然科学的思考でもってすべては明らかにされる」という命題が正しいかどうか、に対して明快な回答が出せない（すなわち、主観と客観が一致するという確かな証明がなされない）ことから、この問題はそもそも原理的に回答可能かどうか、という形となって解明が試みられた（48.22頁）。竹田はその問題に近代哲学者がどのように回答してきたのかを、デカルト、カント、ヘーゲル、ニーチェらにスポットを充てて考察している。それによると、デカルトの神の証明、カントの物自体という概念の措定（近代的二元論＝主観／客観、認識／対象）、ヘーゲルの完全なる知（絶対知）という考え方、それに一切は主観のもたらす解釈（真理は主観の数だけある）であるとするニーチェ、それぞれにもっともなところはあるが、それでも、いずれも基本的には客観と主観の問題を解き明かし得なかったのだという（48.25頁以降；49.103頁以降；50.43頁以降）。

これに対し、フッサールはそもそもこうした問いを立てること自体が誤りであり、客観なるものは存在しないという（49.162頁以降）。従って、そこでは主観と客観の一致に真理があるという構図自体が成立しないのである。フッサールは、真理（ほんとう、正しいこと）は主観と客観の一致によってではなく、主観によってのみ得られるという立場をとった（独我論）。つまり、フッサールにとっては真理（ほんとう）は間主観的に成立しているものを意味しているので、その根拠を客観に求めようとする事自体、問題を混乱させてきたのだとして、真理の根拠は主観の中だけで生じる確信の構造によるという考え方を打ち出した（48.40頁以降；49.168頁および次頁）。このことは、われわれが主観的に正しいと「思っている」ことや体験してそう「感じた」主観的内容の真偽・正誤といったことは、客観との一致によって確かめられることではなく、主観の不可疑性あるいは確信ということであらねばならぬことを意味している。われわれはこのことから、主観（そう思うこと）と客観（物体の法則性）の一致がないときに、主観が誤っているあるいは疑わしいという思考形式をとるのではなく、客観とは別の主観の基準をもって推し量れる「ほんとう」の世界も存在しているのだということに目を向けることの重要性を読み取るものである。このような世界の措定を大切にしない限り、われわれの運動の世界で日常的になっている些細なこと（25.17頁および次頁）の意味は到底理解されないし、また自己観察（Selbstbeobachtung）や他者観察（Fremdbeobachtung）の際のその信憑性（22. - S.109）をめぐる問題も実際は解決できないと思われる。われわれの運動理解はまず「人間の運動」という理解が前提に置かれるわけだから、例えばほんらい心理学は「単純化され、還元されてもはや人間でなくなった怪物の行動には関心がない」（15.143頁）のだと石原が主張するのと同じように、われわれはスポーツ運動の世界を物体の世界へ置き換え（還元主義）ることに専心するのではなく（15.138頁；280頁）、「人間の運動」というものの固有な直接的理解、すなわちそれを主体の自己運動として認識し⁵⁾、主観内部に目を向けると同時に直観あるいは共感などによる内容等を研究していくべきである（24；33.19頁および次頁）。このように考えてくると、かりに運動技術が「運動課題に対する、一つの定まったバイオメカニックス的解答」（13.239頁）であるとして、そのバイオメカニックス的、客観的な Was - 情報がわれわれ運動者主体が共

感しうる Wie - 情報へどのように変換され得るか (22. - S. 102) ということの問題とは別に, そもそもその他の別の次元において, 現象学的に確認される Was - 情報 (図式技術 〈Schema-Technik〉) が存在していることにこそ目を向けるべきであると思われる (22. - S. 103)。そこには経験的で主観的, 素朴な段階なのだといっっては片付けられないような本質的に重要な「生き生きとした生命を与えられた」内容が写し出されているからである。この内容は主観固有の問題を捉えているのであり, それを客観に置き直し (還元主義: 1.87頁), 科学的表現で取り扱おうとしても, それは主観本来の問題の解決には本質的に貢献していないことを知るべきであろう。

(2) 運動技術の科学的研究ということ

今日のスポーツ運動技術に関する一般的な理解には, 課題を達成しえるかどうかの運動形態を問う側面と, 身体的-感覚的にその運動課題を達成し得るレベルに到達しているかどうかを問う習熟能力としての側面があることを指摘できる (3 ; 4 ; 10 ; 19 ; 46)。前者では理想となる運動像は何かが問われ, 運動課題の最善の解決のための没個人的な実施方法 (運動のし方) が探られる。他方, 後者は一定のスポーツ運動行為を実現させるための能力水準がそこでは話題になっているのであり, いわば「できる」「できない」ということが直接的にかかわっている立場である。例えば「け上りをするには, このようにすればよい」「伸膝前転で大切なところはここだ」などは達成を保証する運動のし方を捉えているのであり, 他方, 「彼の運動はすばらしい」あるいは「技術的には問題はないが, 体力的に劣っている」などと言う場合は, その技術を用いようとする能力水準に目が向けられているわけで, その選手の習熟能力の高低が関心事なのである。指導内容としての技術と運動習熟としての技術 (3. - S. 119 f.), あるいは外的指導像 (抽象化されたもの) と運動アルゴリズム (運動習熟) (4. - S. 350) というように, 運動技術は一般に, このような二面性をもって理解されているが, それでも, 没個人的な合理的な運動の「し方」をもって (運動) 技術とし, それを技術を取り込む用意のある個人的能力水準 (スキル) あるいは技術が身についた個人的な状態 (運動習熟: わが国では技能と呼ばれている) から区別しておくことは今日の術語の使われ方から見ても妥当であるし, さほど影響はないと思われる (10 ; 11 ; 19 ; 32 ; 38 ; 41 ; 44 ; 46 ; 52)。

ところで, このスポーツ運動技術をめぐっては, さまざまな学問分野からのアプローチがなされ得る。宮下は運動技術の科学的な研究立場を大きく2つに分けた (1968: 37. 7頁)。1つは身体運動を型 (フォーム) として捉え, 物理的, 力学的に解明していこうとする立場 (= バイオメカニクス; モルフォロジー的研究もこの立場で理解されてしまうことが多いが, ほんらいは異なった立場なのであり, 区別されなければならない: 22, 24, 25, 36), もう一つは運動の遂行を人体の機能との関連から生理学的, 心理学的に解明していこうとする立場である。このような捉え方は, 今日のスポーツ科学においてもさほど変わっているとは思われない。すなわち, 前者の立場では, 例えば骨格の構造や関節の可動性, 筋の力学的作用, 身体の各部位の速度, 加速度, 重心移動や角度

の変化また力積や軌跡などから運動技術が究明され (13; 35; 36), 後者では筋力, 持久力, 敏捷性, 平衡性などの要因を重視し, 筋の収縮に関する生理学的メカニズムやエネルギー代謝また神経生理学的側面からの中枢神経系による運動の調整, あるいは視知覚や筋知覚の調整といった感覚生理学からのアプローチ, さらに, 動作研究や時間研究 (テイラー) に代表される作業そのものの研究, 運動系と知覚系の協応関係を取り上げた運動学習の研究それに自己催眠やリラクゼーションなど人格陶冶の問題などが関連づけられて運動技術を解明しようとしている (16; 33; 34; 35; 36; 37)。また, これらは運動技術 (スポーツ技術) の外的像 (フォーム: 身体の姿勢や四肢の移動に関することなど) と内的像 (内容: 目によって知覚できないパラメーター, 例えば中枢神経系の機能など) というように区別されてスポーツ技術の二側面として捉えられるのが一般である (46. - S. 41 f.)。

しかし, このような科学的研究でそれぞれの要因が明らかにされても, 果たして, それでスポーツ運動技術というものが明らかにされてきたと言えるだろうか。むしろ, そこでは, 技能習熟としての人間の運動能力の特性や物体運動としての人体の運動のメカニズムを解明しているのではないだろうか。つまり, そこではその運動の課題を達成させるためには, われわれ人間のどんな身体的, 体力的, 感覚的, 精神的な能力がそれを支え (内的問題), また, そこにはどんな力学的法則性があるのか (外的問題) という点が前景に立っているのである。これらは運動技術をそれぞれの学問領域の諸要因に置き換え (要素還元主義: 1, 87頁), 「そのようになっている」という自然科学的—客観的形式に変換して捉えているのである。そこでは運動の「し方」そのものは背後に追いやられ, 結局, 問題とされていないのではないか。結論から言えば, これらの学問領域は運動技術そのものの研究にはなり得ないのであって, むしろ, 技術学習あるいは技術トレーニングの領域においてその成果が生かされると言える。

確かにそのような方法によって運動のある一側面は解明されようが, それがわれわれの言うスポーツ運動技術そのものの問題を捉えているとは思えないのである。少なくとも, そこでは運動技術というものがそもそも科学的対象として捉えられるものかどうかの検討がなされていないと思われる。運動技術と実際に直接的に関わるのは最初から最後までわれわれ人間の主観それ自身であり, このわれわれ自身の主観, 感覚, 意識などの非定量化, 非言語化の世界こそがこの運動技術を問題にしてきたのではないだろうか。スポーツ運動技術の科学的研究といっても, 結局は人間のそうした世界に科学的なメスを入れているわけではなく, そのなかの自然科学的メカニズムの側面を解明しようとするに止まり, 依然として「運動技術そのもの」の世界にはメスが入れられていないことを知るべきである。人間の知識は, 渡辺の指摘するところから従えば, ほんらい「Aを今すれば, Bを後に得られるであろう」という形式であったのに, 科学の発達によりそれは「初期状態がAならば, 終期状態はBになるであろう」という人間を離れた予言的な形式に変わってきたという (53. 17頁および次頁)。さらに渡辺は, この形式がすべてにあてはまるところに科学の成功の悲劇があったし落とし穴があったと指摘する (53. 18頁)。さらに〈知〉の科学的研究ということに関

して、野村の指摘はわれわれにとって示唆的である⁴²⁾。野村は世界の姿を「かかわり」との関連で捉え、それはそもそも客観的に捉えることなどできないし、明確に説明していくこともできないといい、それはただ了解あるいは追体験していくのみであるという(42.42頁以降)。そしてその立場は、「今日のわれわれを支配しているところの実証主義的アプローチと根本的に異なるものである」(42.43頁)と指摘する。さらに、「実証主義では、現実を与えられている事実的データを結果として前提し、それに対するなんらかの原因を仮定する、そしてこの原因から因果連関的・説明的推論を行って、それが現在与えられている結果と一致した場合にはじめて事態が解明されたとみなす」(42.43頁)が、一過性あるいは一回性の現象の観点で見ると、社会科学の事象と自然科学の事象との各性質は自ら異なり、社会科学や人間を扱う学問におけるその意味の大きさからすれば、そうした学問では実験的手法を採用することには大きな誤りがあるのではないかと疑問を投げかけている(42.43頁)。また、荘子の「知魚楽」という挿話(42.46頁および次頁)を例にとって、恵子(伝統的な実証主義的立場)に対して、魚の楽しみということは定義できないしそれを実証できないけれども、その魚の楽しみというようなことを積極的に認めていこうとする荘子のとった考え方(立場)を示し、荘子が実在と認識との関係を問題にし、実在の真相は言葉や法則・実証ということを超えた境地で自ら体得されるとしたことを強調している(42.74頁)。

こうしたことは、尼ヶ崎の言う、「一部の学者はあるメロディーを音高やその配列に解析して「本質を知った」というかもしれないが、それは私たちがメロディーに体験する「らしさ」(「淋しさ」かもしれないし「楽しさ」かもしれないし、そもそも言葉にならないかもしれないが)とは全く別の話である。また酒の化学成分の解析は(それはうまみの感覚期間を刺激する物理的原因かもしれないが)、私たちの「うまい」という実感とは別の世界の話である」(1.121頁)といったことと共通して興味深い。これらは実践場面においてわれわれ人間が内から捉えている問題を固有のそして独自なこととして措定すべきであることを指摘しているのである。さらに、すべてを「数学的操作の相対的な量によって評価する」ことを嘆き、生物学や心理学では現象、構造を記述することは不可欠であるとしたローレンツ(6.187頁以降)や、過程と機能の概念によって、「概念的—因果的分析」による理論とは異なった人間学的—現象学的な人間の運動理論を構築したポイテンディク⁵⁾など、科学的研究の限界を示し、そのみでは捉えられない固有の問題圏があることを主張した研究者は枚挙にいとまがない。

このようなことから、スポーツ運動技術を科学的に研究するといっても、まず、それが主観とは無関係な客観的な研究対象として扱いうるのか、あるいは、そのような考え方で対処してかまわないとするのか、それとも、定量化あるいは言語化などではその本質を掴めないようなより主観重視の世界の問題なのかを十分に検討しておかなければならない。

(3) 運動の「し方」ということについて

運動を実際に実行する際のことを考えてみると、われわれの運動は、そもそも「そのようになっ

ている」という客観的形式ではなく、「そのようにする」という主観的形式で実施されていることが分かる。例えば、「手首を素早く返す」「ここで腕を引き上げる」あるいは「背中を順に接触させていく」などは、実施者がその運動(技)をするときに、まさに気をつけなければならないこととして自らの意志で何とかしようとする努力する内容であり、われわれの主観が捉えている内容なのである。その結果としての外的に現れ出た運動形態あるいは運動経過をわれわれは問題にするが、そもそも、運動の「し方」ということになれば、運動をする者の主観内の問題なのではないか。つまり、運動を実施する際にわれわれが欲する情報は、「そのようになっている」といった遂行し終えた結果、あるいは、完成品としての運動経過ないしは運動形態という運動の状態に関する内容ではなく、人間主体の志向性、意識性、意図性、感覚性、努力性によって今まさに遂行せんとする運動成立への主観的一能動的な働きかけのその「し方」なのである。運動の「し方」とは、まさにこの地平において理解されるものであろうし、(スポーツ)運動技術の諸定義にみられるような「実施方法」「し方」「解決方法」あるいは「合理的な運動形態」といった表現による内容も、このような立場で理解されるべきであろう。

このことについて、ここで指導書などに記述されている(運動)技術内容に目を向けてみよう。例えば、金子は鉄棒の後方支持回転を連続させるためには「回転連続技術」が重要になるとしている(21.132頁)。これは回転を連続させるために、有効に機能する身体操作の「し方」があるということを行っているわけだが、それは、回転開始のときには加速的に肩が後方に倒されてスピードをあげるようにするが、その後、終末局面になってくるに従い、「腰角を増大して」それによって回転にブレーキをかけるようにすること、である。要するに、後方支持回転を連続するための技術は、「回転の後半に」回転スピードにブレーキをかけるように、「腰角を増大すること」なのである。われわれが知りたいのはまさにこうした情報であり、こうした形式の知識なのである。われわれはこれこそを(スポーツ運動)技術と呼ぶべきであるが、この内容は、単なる客観情報とは異なった性質のものであることに注意しなければならない。しかし、このような指摘がなぜできるのだろうか？ 科学が発達した今日において、運動を直ちにフィルムあるいはビデオによって画像解析し、そこから測定データを出して技術を解明しようとするが、このような手続きからは上記のような情報を得ることはできない。なぜなら、上記のような情報は、実際に体験あるいは経験し成功する中で獲得しうる主観的形式の内容だからである(もちろん、実際に体験しなくても、潜勢運動〈*Virtuelle Bewegung*: 25.275頁および次頁〉によって対象となる運動(技)を観察することができれば、そうした情報は、ある程度獲得されよう)。まさにこれこそが運動者側から捉えた運動実施上の「真理」であり「技術」なのである。金子はこのような「真理」を掴んだ人は、運動に関する物理学的な説明と一致しない事態に直面した場合、しばしば、その説明がいかに空虚なものかを知るはずだと強調する(21.130頁)。

従って、「運動のし方」(運動技術)の源泉は実践の中にもみある、ということになる。運動技術と実践の関係はこの意味からも、直接的一緊密な関係なのである。言うまでもなく、われわれの

言う「運動のし方（運動技術）」とは、陶芸家、音楽家などの芸術家や大工などの職人と同じように感覚的、身体的経験によって獲得された〈実践知〉であり、また自転車に乗る能力や泳ぎの能力、倒立ができること、楽器を弾く能力などの〈身体知；村上：39.15頁〉あるいは〈感覚運動知能（senso-motorische Intelligenz）；ボイテンディク：25. 271頁および次頁〉を意味しており、それは実践の場の体験とその積み重ねがなければ獲得されないものである。これらは言語化あるいは定量化可能な範囲を越えたところにあるある種の「真理」あるいは「真実」であるが、またそれは「型」の問題から見れば、「～できる」知、あるいは「身に染み込んだ図式」であるともされるものである（1.185頁）。従って、われわれは運動の「し方」（運動技術）の内実を実践知あるいは身体知といったレベルと同じものと考えたものである。つまり五感を十分に働かせ、身体全体を使って獲得した、言葉や概念による理解に縛られない身体の動かし方に関する身体全体の感覚的知識であり、自らの行っている遂行過程を支配している原理である（42.145頁）と。

ところで、この自らの行っている遂行に関する原理とは、戸田が提起した作用スキーマと考えてよいであろう⁵¹⁾。作用スキーマとは覚えたあるいは集めた「資料情報の『使い方』に関するより深層の情報処理構造」（51.6頁）である。戸田によればそれは、例えば、獲得した水泳の泳ぎ方であったり覚えた車の運転技術であり、もっている能力あるいは情報をどう使い、状況によってどのように使い分け使いこなすのかというその「使い方」の深層での知識であり、たゆまない練習によってのみ獲得されるものであるという（51.8頁）。従って、作用スキーマが獲得されるということは、頭でのみ「知的に」その「し方」を知っているということではなく、当然、「できる」ということでなければならない。また、そうした作用スキーマは本質的に言語の媒介を必要としないのであり、人間の各個人が持っている知識の本質的な部分はこの作用スキーマであることを示唆している。このことからこの種の知識の本質は非言語的であることになる（51.9頁）。それでは、この作用スキーマの真実はどのようにして伝えられるのであろうか。

このような非言語的な〈知〉というものが最もそれらしく伝わるといえるのは、野村によれば、それは「感覚—感覚」という枠組みの場合であるという（42.95頁）。もちろん、「言葉—感覚」によってわれわれはその〈知〉を獲得できるが、「感覚—言葉」という枠組みでの言語化には限界があり、その真実を表すのは不十分になるという（42.95頁）。そうした〈知〉の真実の言語化に限界があるというには、それなりの理由がある。野村によれば、それは3つある。一つは、われわれは感覚的、身体的に行っている自らの経験をいちいち意識化していないこと、二つ目は、われわれが経験する行為にいちいち対応する言葉がないということ、そして3つ目は、出来事と言葉との間には完全な対応関係が成立していないということ（42.95頁及び次頁）。しかし、だからといって、作用スキーマとしての〈知〉を何の変換もなしに伝えていこうとするだけでは、〈知〉の広がり保証されない。そこでわれわれは、その作用スキーマを「表現」し、客観的資料あるいは客観的情報を得ようとするようになるが、われわれが注意しておかなければならないのは、この作用スキーマそのものと作用スキーマの「表現」は自ずから次元が異なっているということである（51.9頁）。

すなわち、作用スキーマそのものを敢えて言語化、定量化したり、またその外形的なもの(フォームなど)によって理解することは、意味あることであるが次元が異なるものであることを知っておくべきである。

これまでの考察から、われわれの問題(運動技術)に置きなおして見れば、次のようになろう。すなわち、運動の「し方」(運動技術)は〈実践知〉あるいは〈身体知〉としてわれわれが獲得するものであり、それは非言語的にわれわれの記憶の中に作用スキーマとして蓄積されているものである、と。それはもちろん、必要なときにはいつでも言語を介さず呼び出されて必要な動作を起こし、目的(課題)を達成し得ることを保証している。このようなことから、われわれは運動技術を作用スキーマ的性格のものとして理解するものである。言うまでもなく、このようなものを習熟や技能との関連で、個人的・主観的なもの(個人技法、こつなど)として運動技術(客観的)の下に位置づけてしまうことが一般であるが、われわれはこの個人的・主観的な作用スキーマこそスポーツ運動技術の世界を支えている中核と考えるものであり、それだからこそスポーツ技術は実践のなかで発生し、検証されてきたとする主張(1960)を支持するのである。

(4) 「こつ」から運動技術へ

周知のように、スポーツ運動技術の温床は「こつ」であると言われるが(18. 203頁以降: 220頁)、このことこそ技術の本質を語っていると思われる。つまり、「こつ」は個人的であり、運動技術は公共的、客観的である(18. 202頁以降)と言っても、それは結局は広く通用するのかどうかの問題であって、本質は異ならないということである。ただ、「こつ」は個人的、主観的、感覺的、非言語的なところで問題となるような性質のものであることから(1. 184頁以降; 42)、当然、「こつ」はその個人の中にあってはじめて「こつ」であり得るものなのである。従って、その個人から出て離れたものは「こつ」とは言えない。逆に言えば、個人から離れてもその有効性や共通性を認めざるを得ないような内容こそ「運動技術」と言うべきである。しかし、運動技術ということでそこに公共性あるいは客観性が強調されるようになると、すでに見てきたように、一般的には人間主体を離れた他者としての運動のメカニズムあるいは定量化などの可能な対象としての問題とすり替えられて考えられてしまう。それは運動の「し方」ということの一般性、共通性から知らず知らずのうちに離れてしまっていることにわれわれは注意しなければならない。われわれの取り上げるスポーツ運動技術というのは、あくまで「し方」の一般性、共通性であって、「人間各主体がどのように身体を操作したらよいのか」というレベルでの〈運動知〉の共通項なのである。もちろん、そこにその共通項(技術)を身につける際の「困難さ」をめぐる問題を捉えておくことは必要であるが(第1章第1項)、本論ではこの問題は省かざるを得ない。それではこの「し方」の共通項としての運動技術は、一体どのようにして「こつ」から発展してくるのだろうか。

「こつ」は必ずというわけではないが、運動ではよく問題となる。一般に、運動を習得するには練習の積み重ねが必要である。その過程において、感覺的にあるいは知識として「何かを掴む」こ

とによって、何とか「できる」、失敗なく「できる」、効率よく美しく「できる」という段階がやがてやってくる。そこでは運動者は「こうすればいいんだ」「ここに気をつけてやればできる」「大事なのはこういう感じでやることだ」などといった運動実行上の個人的なポイントを自らの内に見出すことになる。それは外からやってくるものではないし、仮に知識として外から与えられたとしても、改めてその運動者自身の中で新しく発生するものなのである（こつの発生）。だから10人いれば10人の個人的「し方」やそのポイントがそこに生まれるし、注意点もその主観の数だけあることになる。少なくとも個人個人のその運動をやったの感じは同じだとも違うとも言える。つまり、現象学的に見れば、各主体の感じる内容が同じだということは間主観的に成り立っているが、それはその主観の不可疑性、すなわち、そう信じざるを得ないように主観が確信することでしかもたらされないという性質のものであるし、客観的に同じだと言い得る相互の「一致」など確認できるものではないのである（48；49）。この「し方」は一般に「こつ」と呼ばれる。従って、10人いれば10の「こつ」があることになる。そこではかなり個人的に身につけた「し方」（もちろん、その人はその重要性にその人なりに意味を見い出しているし、実際成果をあげているが）が強調されているわけで、それは、いわば個人的経験によって得られた〈知〉であるわけだ。

ところでこの「こつ」というのはよく勘と同じように位置づけられ、言語では言い表されない身体的感覚の世界における伝えるべき真実、真理と理解されているが⁴²⁾、もちろん両者は区別されるものではある。野村によれば「勘とは、直接的認識の一種であり、広い意味に解すれば手加減、こつ、呼吸をはじめとして第六感、靈感、悟りに至るまでが勘という概念のなかに包括される」という。そして、「『こつ』が能動的技能的な働きであるのに対して、勘は受動的認識の働きを意味する。勘もこつも経験の積み重ねから生まれるものであって刻苦精励なしには現れない」（42. 129頁）という。このことからすれば、「運動のし方」というのは勘ではなく、「こつ」としての性格が強いことは言うまでもない。さらに、黒田は勘との関連から「骨」の辞典的意味を挙げているが（31. 22頁）、それによれば「骨」とは、芸術の熟練の奥旨、技の気合い、骨子、芸事の手ごころ、ぐあい、こつあい、調子、呼吸、骨法などであるとし、それは英語では、通例、“knack”という語で示されるが、また「勘と骨とをかねたうえに、さらにこれに予言的直覚力の意味を寓せしめる俗語に hunch なるものがある」という。つまり技巧、巧みなわざ、予感、虫の知らせといったこともそこでは問題になっているのである。さらに、ベルネットによれば、技術は当初運動習熟のし方や方法の意味に理解され、アングロサクソン人はそれを“trick”と呼び、それがシュネルによって“Kniff”に訳されたという（3.-S. 118）。このようなことから、われわれが一般に「こつ」と呼んでいるのは、あることの達成を本質的に保証し得る主観側の方法（し方）ということになるが、少なくともその使われ方の文脈からすれば、それは非言語的で、定量化し得ない実践のなかでしか獲得され得ない〈実践知〉であるようである。もちろん、それはあることの達成を保証し得る行為の主観的納得に支えられていることは忘れるわけにはいかない（42. 65頁）。

このようなことから「こつを掴む」ためには、主体各個の積極的な取り組みと努力が必要になっ

てくる。もちろん、それは個人的であるが、その個人的に獲得された知識にこそ人間が関わる知識における本質が横たわっているのである。つまり、「このような真の知識を獲得するためには、なによりも法則以上のものを読み取ろうとする努力が、またその能力が備わっていることが必須」(42.98頁)なのである。菊池は、このような人間個人に主体性をもたせて自然の問題性を把握する方法を、現在の科学技術の体系方法と区別して「個人科学」と呼んでいる。この個人科学の方法上の特徴は、①感覚を重視すること、②身体的感覚による記憶を重視すること、③分析より総合的な直観によって捉えられたものの重視、である。そして彼は「職人のもつ確かさ」ということで、経験的技術の有意味さを強調している(42.99頁)。このことはわれわれの問題に移して考えても十分通用することである。つまり「こつ」と呼ばれる個人的な運動の「し方」(個人技法)は、菊池に従えば、「個人科学」として獲得された運動実行上の真なる知識ということになる。

しかし、それではそうした知識が得られたという段階で(個人技法)、「運動のし方」(運動技術)との関係はどう理解されるべきなのであろうか。すでに述べたように、主体がそれぞれある同一の運動課題に対してその達成を求めて積極的に取り組んだ場合、そこにはその主観の数だけ「こつ」が生まれる。しかし、10人の「こつ」はその価値や重要さといった点でそれぞれ違いがあるだろう。つまり、どれがいい「こつ」なのか、と。例えば、最も楽な(経済的な)捌きとしての「こつ」はどれか? 最も効果的なのはどれか? 最も美しく見えるのはどのやり方なのか? など、その基準によって「こつ」のもつ価値は同一ではない。例えば、鉄棒のけ上がりの「こつ」といっても、前振りから戻って単に支持になるというだけの目標であるのか、非常に大きなスイングから楽に支持姿勢に持ち込むための目標であるのか、さらにその流れ(経過)が美しく見えるにはどうしたらよいかなど、視点は様々である。しかし一般にそうした問題点に答え得るには、各個人のし方がどうであるのかということではなく、共通していてしかも誰でも納得できるような「運動のし方」は何か問われなければならないし、われわれはそこにこそ関心を向けるのである。

ここでは、多くの「こつ」の間に共通する点はないか、万人に共通する方法(運動のし方)は何かなどが関心事となる(運動技術; 18.220頁)。「こつ」というものはすでに見たように、そのやり方がその行為の「主観的納得」で支えられているものであるが、そこにこそわれわれは「こつ」というものの意義を見出すものである。一般に共通項の抽出に際し、この主観性を排除することが当然のことのように考えられるが、これまで述べてきたように、「こつ」という〈知〉は、まさに主観と結びついていることで生きているのであり、スポーツ運動技術も〈知〉である限り生きていなければならない。すなわち、主観を手放すわけにはいかないのである。従って、共通項の抽出は主観をも含んだ「こつ」感覚、「こつ」内容の認め合い、確かめ合いによってなされることになる。

ところで、一般にこのような共通項の抽出には科学的—客観的な立場からということ、実験をして、キネグラムや軌跡図などを資料としてフォーム分析をしたり、あるいはデータを統計的に処理することで、内容(し方)の有効性が検証される。そこでは、統計的平均値イコール一般法則という考え方、少なくとも統計的処理により出される結果は、われわれの経験から得られる内容より

確かである、という捉え方が優勢である現状は否めない。この点に関して、斎藤は統計的方法の効用と限界を見極めることの重要性を強調し、統計的方法の万能性を否定する(45.45頁以降)。そこで斎藤は統計的方法は、ほんらい「森を見る」ためであったことを指摘し、そうしたものを「木を見る」ことに転用し、あたかも「木を見る」ためのものであったかのように錯覚すると、人間を対象とするときの個体差とか個性などが無視されたり度外視され、あるいはそれが「誤差」として片付けられてしまい、結局そうしたことは研究上致し方ないということで済まされるようになってしまうと強調する。「個別性」こそ重視されなければならない問題(「こつ」もその一つである)にあっては、その差が「統計的に有意」であるといっても、それはあくまで統計的にであり、個別的に有意であったことを証明しているわけではないので、その結果はあまり意味をもたないのである。さらに、統計的処理に過大な信頼を置く場合の最も大きな誤りは、「法則が法則たり得るためには、それは多数によって裏付けられなければならない」という誤解であるという(45.49頁)。ここで斎藤は非常に興味あることを述べている。「なるほど、法則とは普遍妥当性をもったものである以上、多数の事実がその法則の支配下にあることはたしかである。しかし、そこでの多数とはけっして、任意的にそこに存在するランダムな勝手な多数ではなく、おのずから限定された多数」(45.49頁)なのだという。そして、そうでなかったら、ガリレオの落下の法則は成立しなかったであろうと強調する。ガリレオは決してさまざまな形と比重をもった物体が空気中を落下する速度を測定し、そうした実験データの統計的処理を通してその法則を導き出したわけではない。斎藤はただ一つの実事によっても法則は成立し得る例を、このガリレオの落下の法則で指摘する(15.142頁および次頁；45.49頁および次頁)。このことは帰納的方法によって多くの事例研究や実践報告を集め、処理したとしても、それが有効な法則を獲得する手段とは必ずしもなり得ない、ということとして理解されるべきである。

したがって、共通した「こつ」を抽出するのに、多数のデータを揃えればよいというわけではないし、単純に客観的に共通している点(箇所)を抽出すればよいというものでもない。また、統計的に検証すればよいというものでもない。この点が軽視されると、実施上の肝心の点が排除されたり、人間性の関わりや主観性が度外視され、〈身体知〉として得た「こつ」内容から、逆に大切な本質部分をカットしてしまうことになる。「こつ」としての本質部分は非言語的、非定量化といった性質のものである。従って、われわれが求める「こつ」の共通項とは、万人がそれぞれある運動達成を得るために、それぞれが「個人的」にその運動達成の共通的主観的な納得を得られるのを保証し得る可能性の高い運動の「し方」という意味で理解されるべきで、それは平均値でもないし、統計的に有意な内容をも意味してはいない。いわば、科学的客観性というよりは、実践上の信頼性がそこでは求められていると言えよう。

しかし、実際のところ、「こつ」と言われるもののその内実を客観的に確かめることはできないし、まして各人の「こつ」内容が一致しているのかどうかなどは推察でしか確認できない。したがって、われわれが「こつ」の共通項と言って資料化し得るものは、結局は、運動の達成を左右し

ている各個人の非言語的—感覚的な「こつ」そのものではなく、それに対応しうる「表現」を捉えざるを得ないのである。これは前節において述べた作用スキーマそのものと作用スキーマの「表現」は別ものである、ということと同じである。ここで言う「表現」というのは、ほんらい表現できない、視覚化できない、定量化し得ない作用スキーマを、便宜的に分かりやすいように視知覚に訴えかけるように資料化することであり、ほんらいの内から捉えた非言語レベルの内容が当然捉えられているわけではない。この「表現」としての「こつ」は、われわれの主観に働きかけて「こつ」感を発生させるとともに、運動の達成に導く契機としての性質をもつことになる。従って、われわれが共通に取り上げることができる「こつ」は、各個人の「こつ」にふりかけ、そこで残った共通した「こつ」の内容ではなく、その各々の「こつ」の「表現」の共通項なのである。もちろん、それは主観感覚と密接に結びついているので（「こつ」の表現であるから）、科学的にみれば不完全ではあるが、その共通項としての「表現」（運動技術）で示される内容は運動の「し方」の一般性を捉えていると言えよう。それは「こつ」の発生当初からその人間が気づいているかいないかは別として、意識され得るものであり、不完全ではあっても、各主観が運動の達成感覚を得ることを保証するものである。ここにおいて、「こつ」は技術として、すなわち運動技術として定立されることになる。

3. スポーツ運動技術発見の基礎

(1) 「運動図式」の重要性

金子は運動技術の共通感覚的問題性の中で、その非—客観的問題性に重要な価値を見い出している。つまり、運動技術がそもそも「人間の運動の仕方にかかわる術であることを前景に立てる」限り、ボイテンディクという「感覚運動知能」や村上のいう「身体知」の問題は避けて通れないとし（23.21頁）、さらに、中村のいう体性感覚的統合が共通感覚的図式技術の問題に極めて有効な示唆を与えている点を強調している（23.22頁）。この体性感覚的統合はベルグソンの運動図式、メルロ・ポンティの身体図式、フッサールのキネステーゼなどとも共通し得る問題であるという（23.22頁）。このような点は、運動技術の発見ということでは、主体あるいは主観がどう関わっているのかの問題に通じていると考えるものである。本論では、とくにベルグソンの運動図式の考え方に焦点をあて、検討してみようと思う。

ベルグソンはその哲学的心身論において、身体のあり方が認識作用から排除されてしまっている近代認識論に対し、知覚の問題を手掛かりにして、心身関係のメカニズムを問い直そうとした（55.213頁）。そこでは、とくに、知覚と記憶の関係が取り上げられ、知覚の中には必ず時間の持続が浸透しているということから、そこには意識の能動的作用があると指摘した。つまり、貯蔵された記憶の中から現在必要なものを選別して想起しようとする主体の無自覚な意志が外界からの感覚的刺激と結びつくという。従って、知覚は単なる外界の感覚刺激を受け入れるという生理学的なものではなく、「記憶の時間的持続を保持した生ける知覚」（215頁）として捉えられるのである。それは

言い換えれば、「能動的に意味を賦与しようとする作用である」(215および次頁)。そこでは、外界に対する行動への潜在的志向が知覚を意味あるものにする。ベルグソンはこの潜在的志向性は「生活の有用性」であるとして(216頁)、こうした考察から身体を「元来、生活の有用性に向かって組織化され習慣化された(感覚—運動機構)」(217頁)であるとした。このベルグソンの感覚—運動機構は生理学的観点から見られてはならず、能動的な知覚を可能とする際の、意識の能動的な意味賦与作用、すなわち主体の行動への身構えとして捉えられるものである。

このベルグソンの感覚—運動機構としての身体は、湯浅によれば、例えば、訓練を積みかさねて身につけた熟練した職人や芸人の技能などにおいて、「身体で覚える」とか「身体が覚えている」といった意味での、そうした技能を覚えこんでいる「身体」であるという(220頁)。つまり、それは技能を発揮できるような態勢としてすでに身体が整えられている、という状態にあることを示している。ここにおいて、ベルグソンは身体の生理心理学的メカニズムをその根底から賦活し、一定の方向に習慣化する、すなわち、「世界に対する行動的関わりを潜在的に形成し志向するみえざる作用」としての「運動図式(le schéma moteur)」(220頁)というものを想定した。これは、例えば、外国語を聞くようなときに、それを聞き取れる人とそうでない人との差は、単に音の印象が記憶に働きかけるようなことの差ではなく、知覚される音声がすでに分離され、区別されて、結局音節や語として知覚されているかどうかの差であるという(2.126頁)。それは、いわば、耳に入ってくる知覚印象がその段階ですでに理解可能な意味ある言葉となっているかどうか、という点にかかっているのである。そこにこそ運動図式というものが関与することになる。

ベルグソンはこの証明として多くの例を出しているが(2.123頁以降)、湯浅はその中からわかりやすい例を引いて説明している(55.221頁)。それによると、ベルグソンは精神盲の視覚的記憶の再認不能の症状(生理的視覚能力には何ら障害がないのに、過去の視覚的記憶を再認できない)は、視覚印象を身体運動的に方向づける能力の障害によるものと考え、再認の基礎には、運動的序の現象(運動図式)のあることを主張した(221頁)。それは、過去の記憶が無意識領域から意識領域へと上昇してくる過程において、脳によるその記憶内容の選別と、現在に必要なものを呼び起こして当該の行動へと方向づける(身構える)はたらきを意味している。したがって、いま見た町の風景と以前に住んでいたその同じ町の風景とが結びつくのは、この運動図式の存在によってである。逆に言えば、その運動図式というものに障害が起きると、生理的視覚能力に何ら異常がなくても、いま見た視覚像が過去の視覚的記憶と結びつかないので、それが何なのか、何を意味しているのかわからないのである(221頁)。

こうしたベルグソンの運動図式の考え方は、スポーツ運動技術あるいはその発見とどのように関わってくるのであろうか。運動が「できる」という場合、その運動者自身が「できた」ことを「わかる」ことでなければならない。ベルグソン流に言えば、それは、「できた」行為を再認しているということになるが、「できる」ということには運動技術が関わっているのだから、「わかっている」ということは、完全ではないが、その(運動)技術的なことも併せて「わかる」可能性を与え

ていることになる。いま実施した運動(技)が先程実施した運動とどこがどう違うのか、先程よりいいのか悪いのか、いまはどこをどのように注意して身体を操作させたのか、またそれはうまくいったのか、などの自己観察によって主観的な評価ができるということは、いまの自分の運動を再認できてはじめて可能なのだ。運動学習においては、例えば、これまで未習得の運動を習得しようとする場合、何をやったかわからない、とか、わかっているができない、あるいは、素晴らしい達成を示すのにその詳細についてはよく語れる人とそうでない人がいる。いずれも皆その同一の運動の習得を目指して練習に取り組んでいるのだが、さまざまな習得段階が生まれてしまう。そこでは、その運動の達成に直接影響を与えている(運動)技術は、同じようには写し出されてはいないと思われる。もちろん気づいているかいないかは別として、その技術(身体の動かし方のポイント)というものは、どの学習者にも同じように関与するものでなくてはならない。しかし運動図式の進展の程度によって、各学習者の「け上がりはこうすればいい」というポイントに差が生まれてくるのである。そこには運動図式の機能が十分でないものから、非常によく機能しているものまである。このことは、どれが正しくどれが誤っているかを指摘しうるものではない。ただ、そこに生き生きとした「し方」の内実が呈示される機会が与えられる、ということである。ここに、運動技術を内から捉えることの基盤として、ベルグソンの運動図式が関わっていることを指摘するものである。

このようなベルグソンの運動図式は、運動の学習ということと関連させて考えた場合、その運動の「し方」が「できる」ことが「わかる」ことを保証する源泉なのである。つまり、わかって一できて一わかる、という構造を支えていることになる。実際には、そのような一連の形式の行為の中で、その行為の流れを「掴む」ことを保証するのであるから、その運動の課題を達成させられる重要なポイントに目が行く、あるいは、そこに気づくことを可能にしている。また、それは自己の運動感に支えられた「生き生きとした」運動の「し方」を捉えているのである。このように運動図式の存在こそが、運動の「し方」としての運動技術の内からの発見行為を支えていると言えよう。

(2) 感覚の納得

運動図式によって、われわれには自己の運動についての内からの生き生きとしたその実施内容を知る契機が与えられるが、それは、まず運動全体に対するわれわれの主観的評価という形式をとる。例えば、「支持になるにはこんな感じだ」という感覚、「シュートは入れることができる」という自信、「今の逆上がりはここをちょっと失敗した」などの自己観察、それらは運動者自身の主観的感覚による内からの今の運動に対する評価なのである。

言うまでもなく、われわれはある運動を習得する場合、あるいは運動を実施する場合、その運動財を理解して課題や目標を把握することから出発し、その運動の構造や具体的な「し方」をある程度「わかった」上で実行に移し、それが課題の達成に繋がれば「できた」とする。つまり、運動実施前の「わかる」ということに「できる」の鍵が握られているとする考え方が一般的である¹⁴⁾。

そこでは、本人が「こうする」「ああする」ことの事前の知的理解がなされることを重視しているわけだが、運動学においては、実際の「こんな感じで」とか「こんな感じだった」などの主観的基準や主観的なポイントに対し、運動想像力 (Bewegungsphantasie) や運動投企 (Bewegungsentwurf)、運動表象 (Bewegungsvorstellung)、運動感 (Bewegungsgefühl) あるいは運動メロディ (Bewegungsmelodie) などの問題を捉え得る (22; 23; 25)

このようなことは、学習者自らが自己の運動の過去、現在、未来の状態に対して、意識的、無意識的に主観的な評価をし判断を下している、ということの意味する。これを可能にしているのは、学習者の自らの内にある、外からの客観的な基準ではなく、むしろそれをも考慮にいれている主観的な評価基準である (42.180頁)。そして、「われわれは処理進行中に課題要求の評価に基づいた主観的学習基準によって、自らの処理進行の程度を評価し『まだまだ』とか『もうこれぐらいでよいであろう』とかいった決断をし」ていくが (42.181頁)、しかし、実際のところ、そのような自己評価及び判断は、単に、そうした内的な主観的基準と実際に運動を実施するあるいは実施した際の内的データとの一致の状態ということでのみなされるのではない。そこには、運動の課題の達成の程度をめぐる「らしさ」の問題 (1.71頁以降) が関わっていることを指摘できる。例えば、け上がりを実施して支持になれたときにわれわれが「なるほど」と感心あるいは納得したり、また「いまの実施のし方はあまりよくない」とか「何となくおかしい」といって評価するのは、いわば「それらしさ」、つまり「け上がりらしさ」を捉えてのことなのである。それはけ上がりというものの理想的な運動形態を知っていると、その運動の定義的理解あるいは概念を知っているというだけでは出てこない。例えば、そこに展開されたけ上がり、たとえ支持になれなくても、下半身がタイミングよく鉄棒に引き寄せられ、振れ戻りの際に身体が鉄棒からあまり離れず、しかも肘も顕著な曲がりを見せない場合には、われわれはそこに良い判断を下す。一方、支持になったとしても、全経過にわたって膝の曲がりが見られ、回転上昇のときのタイミングが「何となく」ずれているような感じがしたり、また肘曲がりや胸で受け止めて支持になるといった捌きに対してはわれわれは良い判断を下さないだろう。また、鉄棒での振動技において必要不可欠な技術とされている「あふり」 (21.26頁以降) にしても、自ら「いまのあふりはいい」とか「いまのはちょっとおかしい」といって判断評価し、その肩の脱力と腰あふりのタイミングを少しづつ習得していく。その判断評価は、単にその客観的な運動経過の理想的な運動経過からの「ずれ」ということではなく、実施したその振動技とその際のわれわれ主観との照合によって、そこに「らしさ」をもった振動技が直観されるかされないかによってなされているのである。このような「らしさ」は「全体的印象として捉えられるもので」 (1.81頁) あり、個々の特徴や変化を捉えても「らしさ」の視点は出てこないということになる。これは、運動のゲシュタルトの視点とも共通している (25.29頁および次頁)。いわば、け上がりというもの、開脚旋回というもの、ジャンプシュートというもの、スパイクというものを、この「らしさ」の視点が捉えているのである。この「らしさ」の視点は、また運動形態の収斂性という問題 (18.156頁および次頁) とも関連するものであり、どっちつかずの曖昧

な運動形態を判断評価するときに、大きな関わりをもっていると思われる。

ところで、このような「らしさ」の判断評価は、言語を介して行われたい。われわれの主観的—感覚的レベルで行われる。ただ、注意しておかなければならないのは、われわれはそこで「～らしい」とか「～らしくない」あるいは「おかしい」などと判断評価するが、それらは「正しい」とか「間違いだ」という判断と同一ではない、ということである(1.79頁)。「正しい」とか「間違いだ」ということは、真偽の判定に関わることで、そこにわれわれの主観的—感覚的要素が入り込むことは許されない。一方、「なるほど、それらしい」とか「それはおかしい」という場合は、その判断者がそこに主体的な関わりをして、ある視点からその現象を捉えた結果、「それを受け入れて同じ態度を共有するか、拒否するか」が問題なのである(1.106頁)。そこでは「真理が問題」かあるいは「納得が問題」かが分かれ目である(1.106頁)。われわれが捉えた「らしさ」はその意味からすれば納得の問題であるが、それが主観的—身体的—感覚的レベルのことであることから、それは「感覚の納得」の問題と言えようか。この「感覚の納得」は運動をした際の主観的な内容に関して、自らがそれを受け入れるかどうか、ということである(1.106頁)。つまり、そのいまの運動の「し方」を受け入れるかどうかということに繋がっていく。もちろんそこではその運動の「し方」が正しいのか間違っているのかどうかはわからない。しかし、スポーツ運動技術の発見に際し、この「感覚の納得」ということは、運動の「し方」という主観的行為を一つ一つ検証していく上で、きわめて重要な手続きなのである。

(3) 主観の確信構造

われわれが「こつ」を掴むのも、公共的—共通的な運動の「し方」(運動技術)を求めるのも、そこには共通して主観の働きがある。そもそも、運動達成が保証されるとするその運動の「し方」は主観内においてどのように発見されるのか、また、それが運動技術として成立するには、主観内のどのような構造に支えられているのか。

現時点においてわれわれは、例えば、振動系の技では「あふり」技術(21.26頁以降)が、マットの前転では回転加速技術(18.412頁)が、マットの宙返りでは腕の振り挙げ制動技術(18.418頁)が重要であるとして疑わない。つまり、上記の運動を遂行するに際して、そうしたやり方(「こつ」→運動技術)が必要不可欠だ、と信じて疑わないのである。それらは今日、運動達成を保証する技術情報として受け入れられるものであるが、それを身につけた選手であろうと、まだ身につけていない選手であろうと、まさにその個人自身によってまさしくそれは技術であると確認されるには『その運動の「し方」によって「なるほど」その運動は達成されるのだ』と体験的に納得されなければならない。運動技術とは、ほんらい、そのような地平においてはじめて組上に載せられるものである。われわれは運動するときには、必ず運動実施上重要な「何か(こつ、技術)」に注意しているが、それでその運動の達成が果たされるならば、その「何か」はその運動者にとって達成を保証してくれる「疑えない拠り所」となっているはずである。このように、「こつ」ある

いは運動技術は、運動遂行においてわれわれ主観から疑われるものであってはならないのである。

このような点に関してフッサールの行った研究はわれわれにとって示唆的である（14；48；49）。フッサールは〈超越と内在〉の原理を明らかにしたが（14.196頁以降；48.90頁以降），それによると，超越とは，まずわれわれに現れ出ていることの経験であり，多くのドクサ（思い込み）を含んだものであるとする。そして，そのドクサを払い，そこに残った不可疑性のものが内在と呼ばれる。それはもうこれ以上疑うことのできぬ原的な直観（48.47頁）であり，疑うことに意味がない源泉であるとする。すなわち，「生身のありありとしたありさまで与えられる事物的なものはすべて，その生身のありありとした所与性にもかかわらず，存在しないこともありうるのである。生身のありありとしたありさまで与えられる体験は，存在しないこともありうるということは全くないのである」（14.200頁）。これは，われわれが思ったり感じたりした内容（「それは美しい」「いまのは失敗した」「手首はうまく返せたと思う」などで，これらは可疑性を排除できない）とそのように思ったり感じたりするといったその体験行為それ自身（「そこで美しいと思ったこと」「失敗したと思ったこと」「うまくできたと感じたこと」などの知覚の初源的な事実性で，それは不可疑性である）との区別を指摘したもので，われわれ人間がものごとを「確信」する基礎的原理がそこで示された。つまり，「内在」という不可疑性の根拠となるものが，あらゆる判断と認識の源泉なのである（48.98頁），と（ただし，これは正しい判断や認識の獲得を保証することを意味しない）。われわれの日常の経験はこのように，可疑性（超越）と不可疑性（内在）の側面があるが（48.94頁），そのうち「内在」こそが人間のものの真偽，正誤を問う能力の源泉を意味しているのである。つまり，われわれ自身の内在的知覚（「今の技さばきはすばらしく感じられた」など）こそが，ものごとの確かめの最終的な基準（確信）となっているのである。

こうしたことをわれわれの問題との関連で言えば，われわれは最終的に内在的知覚によって，「こつ」あるいは運動技術の存在を確かめることになる（ただし，それは納得あるいは同定ということであって，最終的な確証でないことは知っていなければならない）（48.97頁）。そして運動技術は，いわば，運動の達成に対しての複数のわれわれの動かし難い強い確信（間主観的）によってもたらされるのであり，その意味で，その運動の「し方」は，その運動達成に関しては「真理」であり，「客観的」なのである。この場合のその運動の「し方」の真実性とは，主観の内側で問題になるが，それはどうしてもそう信じざるをえないという形で，「〈意識〉のむこう側から人間の自由な意志をねじふせるようにやってくるもの」（確信）である（49.179頁）。つまり，それは「たまたま一致したり，恣意的に一致させたりできない性質のものなのである。ここに真理（運動の「し方」＝スポーツ運動技術）発見のための，主観の確信の構造に目を向ける必要性が生じてくる。

竹田はフッサールの捉えた確信の構造の問題を簡単にまとめ直している（49.171頁以降）。われわれの問題としてそれを考えた場合，それはどのように捉えたらよいであろうか。われわれはある運動を実施するとき，言うまでもなく，何らかの「し方」を念頭においているはずである。すでに有効な（運動）技術が分かっている場合では，その運動の「し方」を頭に入れて行うであろうし，

まだ未知の技であれば、どうやったら「できる」かを模索しながら多様な運動の「し方」を体験するだろう。いずれの場合も、その本人がまだその達成を経験していないならば、その本人にとっては、その運動の「し方」は常に発見の対象である。この原理が（スポーツ運動）技術のドグマ性を打ち破る根拠であろう。とにかく、まず個々の主観がその運動に取り組み、それぞれが「こうしたほうがいい」とか「こんな感じでやるといいぞ」など、その運動の「し方」に関して何かを掴む段階がやってくる。それは各個人が掴んでいるその運動の「し方」に関するその主観の内側から獲得した情報で、その個人なりの「確信」（内在的知覚）に基づくものであり（こつの発見）、その本人にとってはそこでの主観感覚は疑うことはできない。しかし、その他の学習者にとっては、その人の獲得した情報が自分にも有効かどうかはわからない。ましてや一般性のある「し方」かなどはまだ問題にならない。それはまだ、その本人がただそのような「し方」がいいと思っている、という段階なのであり、そこに自分の獲得した「し方」よりもいいと思われる方法が入ってきた場合には、自分のいままでの方法を疑ってみることになる。われわれはこのような個人的レベルでの運動の「し方（作用スキーマ）」を「こつ」と呼ぶ。これは自分自身の確信（超越論的主観の構造）（49. 170頁）からくるものである。

それでは、公共的な運動の「し方」、すなわち運動技術（情報）をわれわれはどのようにして獲得するのか。すでに述べたように、各個人はそれぞれに「こつ」とも言うべき「し方」を獲得するが、同一の運動課題に対してどのようにするのが最もよく、誰でもそれができるにはどうすればいいのか、という問題が出てくる。つまり、ここでは同一の運動課題に対しての複数の主観の関わりを否定できない。そこでは、さまざまな「し方」やポイントが出てくる。もちろんそこに出された内容にはそれまでの各個人による確信の像というものがあるが、その確信はほんらい、「正しい」とか「共通性」を意味していたのではなかったことに注意しなければならない。それまでは、個人内の確信で運動の「し方」の有効性が問題になっていたが、この段階では、他者との関係（間主観性）による確信構造で運動の「し方」の有効性が問われることになる。それは、すでに見てきたように、その運動を達成させるのに共通した『ある「し方」がいい』というのは、それが力学的に合っているからだというのではなく、『そうする「し方」がいい』ということ了他者（他我）も確信しているはずだ、という私の確信が成立するかどうか、というレベルの問題なのである（間主観の構造）（48. 131頁および次頁；49. 171頁および次頁）。しかし、自分のいいと思っているその「し方」は、自己が内在的知覚によって得た確信（こつ）であっても、それは同時に、われわれは他者とともに同じ世界に生きているという強い共通の確信（了解）にも支えられているわけで、他の人たちも自分と同じ確信を得ているという思いが同時に入り込んでいる（49. 179頁）。したがって、そうした共通の確信と私個人の内在的知覚による確信の振り分け（確かめの構造）がうまくできるならば、そこに共感しうる共通的、妥当な運動の「し方」、すなわちスポーツ運動技術の呈示が可能となろう（運動技術の発見）。このようにして、共通の確信を背景にして、その有効性、合理性などの点から運動技術が論じられることになる。しかし、このようにスポーツ運動技術はわれわれ

主観の確かめの構造によって成立しているわけなので、そのことから、スポーツ運動技術は「絶対的な真理」を意味し得ない(36.261頁;49.178頁)。それは、これまでと違う運動の「し方」が現れ、それらと共存せねばならぬときまでの「真理」である。

結 語

スポーツにおいて、技術(運動技術)は運動達成を保証する中核的要素である。しかし、この運動技術の研究となると、それはきわめて不十分なアプローチであることが指摘できる。科学が驚異的に発達した今日にあって、スポーツ科学もその自然科学性を色濃く出している。運動技術という問題も、そうした流れにあって、各学問領域で厳密な科学的な研究がなされ、表面的には十分な成果を挙げているかのような感じさえする。しかし、果たしてそうだろうか。そもそも、運動における技術という問題は、人間主体の関わりを抜きに考えられないのではないか。これまでに現場で問題になってきたスポーツ技術はわれわれが実践の中で発見してきたのであり、そこに大いに主観の関わりがあったのである。上手、下手、「こつ」、試行錯誤、熟練、こうしたことはわれわれが積極的に運動にかかわった証拠であり、その結果としてわれわれは「技術」を獲得したのである。本研究の論点は「発見」ということで、「技術」のこうした性格をも明確にしたかったのであるが、十分な考察ができたかどうかは疑わしい。

運動技術は、そもそも、「もの」があるのと同じような仕方では論じるわけにはいかないと考えるものである。運動技術という観点から、研究サイドと現場サイドの取り組みを見てみると、マルチンの指摘を待つまでもなく(32.-S.182)、技術領域の本格的な研究は立ち遅れている。両者ともトレーニング分野には鋭いまなざしを向けるが、スポーツ運動にとっての中核的要素である技術に関しては、現場サイドが鋭い視点をもつものの、経験的にとどまり、学問的、科学的なアプローチがあるとは思えない。それは、定量化しやすいトレーニング分野の勢いに押されてしまっているからであろうが、スポーツ運動技術の問題はそれにふさわしい方法で取り上げていくべきではなかろうか。この点に関しては、今後、十分議論されなければならないと思われる。本研究がそのための一助となれば幸いである。またそうした議論が活発となっていくには、今後、モルフォロジーをはじめ、現象学や人間学などの人間主体を大切に、積極的に扱っていく学問分野の知識を大いに取り込んでいくことが不可欠である。

引用・参考文献

- 1 尼ヶ崎彬：ことばと身体 勁草書房 1990
- 2 ベルグソン：物質と記憶 ベルグソン全集2 白水社 1977
- 3 Bernett, H.: Terminologie der Leibeserziehung. Karl Hofmann 1962
- 4 Blaser, P. / Vorhölter, H.: Die sportliche Technik als Gegenstand des motorischen Lernens. in : T. P. K., Nr5 1988
- 5 Buytendijk, F. J. J.: Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung., Springer

- Verlag 1956
- 6 エバンス：ローレンツの思想 思索社 1979
 - 7 フェッツ：体育運動学 不昧堂出版 1979
 - 8 F. I. G. : Wertungsvorschriften Männer 1989
 - 9 ゲーナー：スポーツ運動学の展望 スポーツ運動学研究1号 1988
 - 10 Grosser, M / Neumaier, A. : Techniktraining. , BLV Verlagsgesellschaft, 1982
 - 11 Härtig / Buchmann : Gerätturnen-Trainingsmethodik. , Sportverlag Berlin, 1988
 - 12 長谷川裕・佐藤裕：「わかる」ことと「できる」ことの間 体育科教育 8月号 1981
 - 13 ホッホムート：スポーツ運動のバイオメカニックス 新体育社 1981
 - 14 フッサール：イデー1-1 みすず書房 1983
 - 15 石原岩太郎：意味と記号の世界 誠信書房 1982
 - 16 加賀秀夫：運動技術の心理学 体育科教育 2月号 1968
 - 17 金子明友：運動技術論〈序説運動学〉大修館書店 1968
 - 18 金子明友：体操競技のコーチング 大修館書店 1974
 - 19 金子明友：技法、技能および技術 新体育 11月号 1975
 - 20 金子明友：「できる子」と「できない子」 体育科教育 9月号 1982
 - 21 金子明友：鉄棒運動 大修館書店 1984
 - 22 Kaneko, K. : Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung. , 筑波大学体育科学系紀要, 第8巻 1985
 - 23 金子明友：運動技術の今日の問題 体育科教育 10月増刊号 1985
 - 24 金子明友：体育学習の運動学的視座〈保健体育科教育論集〉東信堂 1988
 - 25 金子明友・朝岡正雄編著：運動学講義 大修館書店 1990
 - 26 小林一敏：運動技術のキネシオロジー的機構 学校体育 2号 1968
 - 27 小林一敏：運動技術のキネシオロジー 体育科教育 2月号 1968
 - 28 小林一敏：運動技術の概念規定の吟味-2 体育科教育 6月号 1973
 - 29 小林一敏：「できる」と「できない」の間 体育科教育 9月号 1982
 - 30 小林一敏：運動指導の技術学 体育科教育 10月増刊号 1985
 - 31 黒田亮：勤の研究 講談社学術文庫 1980
 - 32 Martin, D. : Grundlagen der Trainingslehre I. , Hofmann verlag 1979
 - 33 松田岩男：運動技術の分類〈序説運動学〉大修館書店 1968
 - 34 松田岩男：現代スポーツ心理学 日本体育社 1975
 - 35 松井秀治：コーチのためのトレーニングの科学 大修館書店 1982
 - 36 マイネル：スポーツ運動学 大修館書店 1980
 - 37 宮下充正：運動技術の生理学 体育科教育 2月号 1968
 - 38 Bernd Mühlfriedel : Trainingslehre. , Diesterweg Sauerländer 1983
 - 39 村上陽一郎：技術を考えるための予備的構想〈技術思想の変遷〉朝倉書店 1981
 - 40 村上陽一郎：技術とは何か NHK ブックス 1990
 - 41 Neumaier A. /Ritzdorf, W. : Zum Problem der individuellen sportlichen Technik. , in : Leistungssport Heft 5 1983
 - 42 野村幸正：知の体得 福村出版 1989
 - 43 オルテガ：技術とは何か 創文社 1955
 - 44 Röthig, P. : Sportwissenschaftliches Lexikon. , Verlag Karl Hofmann 1983
 - 45 斎藤幸一郎：人間心理学序説 協同出版 1976
 - 46 Starosta, W. : Das Lehren der Technik und die Technikverbesserung in den Individualsportarten. , in : Leistungssport Heft 3 1988
 - 47 Stautner, B. : Von der Rolle vorwärts zur Sprungrolle. , in : Sportunterricht Lehrhilfen Heft 7 1985
 - 48 竹田青嗣：現象学入門 NHK ブックス 1989
 - 49 竹田青嗣：現代思想の冒険 毎日新聞社 1990

- 50 竹田青嗣：現代思想・入門 JICC 出版局 1990
- 51 戸田正直：記憶とは何か 数理科学 Number 201 1980
- 52 Thie β / Schnabel : Grundbegriffe des Trainings ., Sportverlag 1980
- 53 渡辺慧・渡辺ドロテア：時間と人間 中央公論社 1985
- 54 吉福康郎：スポーツ上達の科学 ブルーボックス 1990
- 55 湯浅泰雄：身体論 講談社学術文庫 1990